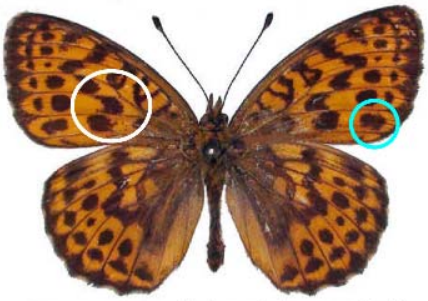
コヒョウモンとの初めての出会いは 1968 年 8 月の上高地。小梨平キャンプ場での貸しテント利用で、自前飯盒炊さんをしたり、キャンプファイヤーを囲んだりの一夜を過ごした後、妻と明神池までの散策を楽しむ途上、樹林帯の少し開けた沢沿いに咲くヒヨドリバナを訪れていた本種をネットインしたもの。当時、国立公園内では小石の位置を動かしてもいけない、という法規制があるようには聞いていたが、上高地でチョウの採集が禁止されているかどうかは知らなく、明神池近くの河原でコヒオドシや色あせたツマジロウラジャノメ♀もネットインしている。初の本種採集個体は右図で分かるように、前翅外縁沿いに縦に並ぶ大きな黒紋が右の紋にくらべて左側で横長に大きく非対称となった変異♀である。

Aug.12,1968 上高地白沢
コヒョウモン ♀
（前翅黒斑点非対称）

裏面
Aug. 12, 1968 上高地白沢
leg. M. Shimazaki

その後、北海道南富良野の布礼別川林道のあちこちで多数頭が飛び交う光景に出会い、信州の高原でもその姿を目にできたが、信州ではヒョウモンチョウとの混生があって、捕獲してから手元でじっくり観察しないかぎり、その区別は難しい。野鳥の会メンバーやチョウは写真撮影だけという人のなかには、野外観察や写真記録だけでよく無益な殺生はすべきでないと言い切る人がいたりするが、学術的な見地からの採集による標本化は決して無益な殺生ではなく、教育的な立場からも必要なことである。学術標本としては一地域♂♀表裏で 4 個体あればいいわけだが、ゼフィルスなど飼育によって多数の新鮮個体を羽化させる技術が進んだために、ひとつの標本箱に同じチョウをぎっしり並べて眺めることを趣味とする愛好家がいることも事実で、自然界での無益な殺生はしないでおこう、という考えには賛同する。

いずれにしても、このコヒョウモンとヒョウモンチョウとの違いを野外観察だけで見破ることは簡単でなく、たとえ写真記録を撮ったとしても、前翅外縁がやや丸みを帯びたのがコヒョウモンで、ヒョウモンチョウでは直線的であるとか、白丸部黒紋がコヒョウモンでは楔状だがヒョウモンチョウでは四角、水色丸部の黒紋 2 個がヒョウモンチョウでは分離するなどという特徴以外の差異を読み取ることは難しい。両種個体を手元に準備して裏面の複雑な模様を比較すればさらに両種の微妙な違い：外縁沿いの青白色帯がコヒョウモンでは明瞭だがヒョウモンチョウでは不明瞭となる、などの特徴で判別できるが、その差異を判じるだけの裏面写真記録を撮ることは容易ではない。



July 11,2004 富良野布礼別川林道
コヒョウモン

裏面

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.

July 11, 2017　愛山渓

かつてオオイチモンジをみた二股の右奥ダムまで行こうとしたが途中が工事中で進めず、その往復途上に 1999 年の訪問時に路面で吸水していたコヒオドシやミヤマカラスアゲハなどのチョウの姿が全く見られないという寂しい状況。やむなく一気に高度を下げてブタナが一面に咲く広場へと戻り、黄色い花に群がるウラギンヒョウモンを「青少年のための科学の祭典」用に妻と二人でネットインして過ごす。裏面の模様や鱗粉の濃淡など、かなりの個体差がみられるが、いちいち確認することはしない。稀にクジャクチョウとコヒオドシもブタナでの吸蜜目的で飛来する

が、コヒオドシはカメラでの接近に敏感でとうとうこの日は撮影記録がとれず。ヒメジョオンには春型のサカハチチョウがいて、ブタナにはコヒョウモンもやってくる。

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.